

ジंकス

あのおおさわぎと現在をたとえて言うのならば、祭りの後以外にふさわしい言葉はないだろう。

ふきっさらしの屋上で、ほどよく冷えた金属（アロマパイプ）を持って余しながら、おれはそう考 え て い た。

春と言うも名ばかりの風の寒さ。だが、春なのだと思えば、昨日と変わらぬひどく冷たい風も、ど こ か し ら 優 し く 思 え る。

なんて、暦とアナウンサーのに影響を受けるおめでたい人間の数はやたらと多い。双樹がつまらなそうに見ているファッション誌でも、パステルカラーが乱舞して、むきだしの腕と脚が健康美を競っている。いい気になってそんな格好で出歩けば、てきめんに風邪をひくに違いない。バードスキンのノースリーブなんて、見苦しい以外の何者でもないんだがな。

『こーちゃん。ほかの誰が言っても、オマエだけは言うなよ、ソレ』

う ん？

『オマエね。朝晩なら氷点下、昼間だって一ケタ気温の屋上でひなたぼっこって、どういう修験者よ』

いい日差しじゃないか。まあ、おまえには縁がないだろうけどな。日陰と日向、風の谷間を感じ る 繊 細 な 神 経 っ て の は。

『むしろ俺よかオマエのが寒さに鈍感な、しろくまの神経だろ』

お れ は 声 を あ げ て 笑 っ た。

そこにはいない存在（やつ）の声。わざとらしいためいきも、宙を仰ぐしぐさも、そして、口唇の端をゆがめた皮肉な笑顔も。あえかな日差しのぬくもりが傍らの体温に変換されるほど、そ う、 お れ は い か れ て い た。

のんびりと屋上で昼寝でもしながら待っているさ。だから 。

ああ、おれは知らなかったんだ。のんびりするにも、ある種の才覚が必要だなんてことは、想像もしていなかった。今までいくらだってやれたことなのに。砂をかむようなとか、一秒が一時間にもとか、そんな形容が、皮膚感覚として理解できる。気がついたら夕方どころか、時計を見てもほんの一分も経っていない。

そこにはいない人間の声で、鼓膜を刺激されて喜びを感じるほどの煉獄だった。まぶしすぎる日差しが、指の間を通して網膜につきささる。乾いた関東の風がのどにしみる。

あ あ。 ま だ、 ほ ん と う に ま っ び る ま な ん だ。

二月もすぎれば、三年生は自由登校。寮こそ三月末あたりまで滞在できる。だが、卒業式がおわれれば、それこそ大学受験の報告なんて理由くらいしか、卒業生が学校（こんなところ）に来る理由 は な い。

昼休みのチャイムで屋上にのぼった。ずいぶんと時間がたったはずなのに、まだ終わらないのか。

おれは、のんびりと昼寝でもしていなくちゃいけない。日一日が、いつの間にか過ぎ去っていく み た い な、 そ ん な 日 常 が 必 要 な の に。

もっと、のんびりとしていなくちゃいけない。そうしていないからなんだきっと。だから、来 な い。 だ か ら ヤ ツ は 帰 っ て こ な い。

なぜなら、そうやって待っていると云ったおれにヤツはうなずいたから !

「 」

ひどく冷えた空気に溶ける自らの吐息。ほんの一瞬、存在を主張する白い水蒸気。駄目だ。もっと、もっと泰然自若と。そうすれば、そうすればきっと。

「う あ、 さっ むー」

今日は寒の戻りだそう。寒いも通りだろう。

「つ うか、相変わらず修験者だね」

うるさい。おれはここが好きなんだよ。

「シ カ ト す ん な よ」

な ん だ と?

「ちょーっと遅れたのは悪かったけどさ」

おれは目を見開いた。

「なあ」

金属(アロマパイプ)が打ちっぱなしのコンクリートに転がる音がした。

おれは、声が聞こえた方へと振り返った。

思わず後ずさろうとして、フェンスに阻まれる。

ガクランの背に、ひどく冷えた金属の感触。

視線の先で、図々しいまでに鮮やかな幻が、よおと片手を挙げた。

「卒業しても制服って、ただの変態よ? それとももしかして 」

ヤツは、屋上の扉をしめると、声をひそめ、あたりをうかがった。おれは、たわんだフェンスに打ち出されたみたいに、前が出る。

記憶の通りにすっとぼけたヤツを、おれは抱きしめた。

それは、幻のくせに温かくて、やけに確かな感触で、腕の中に収まった。

fin.